

アメリカの危機と ナンバーワンの日本

中嶋 嶺 雄 (C35)

(東大教授、国際関係論・現代中国学)

ハーバード大学教授エズラ・F・ヴォーゲル氏の近著「ジャパン・アズ・ナンバーワン」(邦訳、TBSブリタニカ刊)が大変なベストセラーになっている。決して際本ではないこの本がなぜこれほど人気を博したのかを考えると、興味深い問題であるけれど、ヴォーゲル氏の地道な日本研究の成果が、わが国で広い読者を獲得したことは、氏の友人として、私にとっても大変嬉しいことである。

ヴォーゲル教授は、今回、一躍、日本研究者として知られることになったが、氏は本来、現代中国の研究者であり、ジョン・K・フェアバンクやベンジャミン・I・シュワルツによって代表される浩瀚な「ハーバード中国学」の伝統を受け継ぐ中堅の優れた中国学者なのである。氏の代表的な著作「Canada under Communism: Programs and Politics in a Provincial Capital, 1949-1968」(Cambridge: Harvard University Press, 1968)は、解放後の広東の社会主義的変容の過程を得意の社会学的アプローチによって分析した名著としてすでに高い評価を得ており、このような氏の業績と誠実な人柄のゆえに、一九七二年、四十二歳の若さでハーバード大学東アジア研究センターの所長に就任して今日にいたっているのである。ついでに記せば、中国の地方主義にも着目したヴォーゲル氏のごうした地域研究の立場を紹介する意味も含めて、私のゼミの会が一九七五年一

月に主催したシンポジウム「現代日本の政治——中央と地方——」には氏をディスカッサントとしてお招きし、私のゼミナールの学生や卒業生諸君とともに日本の政治のシステムと実態を一夜論じあったこともある(このシンポジウムの内容は中嶋ゼミの会の機関誌「歴史と未来」第四号(一九七六年九月)に収録)。

ヴォーゲル氏は、こうしていまやわが国でも著名になったが、氏が現代日本研究のために注いだ努力も並々ならぬものであることは、氏が日本語にすでにきわめて堪能でありながら、今回の著作の基礎になった日本の政財界や官界人からの事情聴取に備えて、日本滞在中、毎晩のように日本語のレッスンを受けていたことによっても知られることができる。そして、明らかにベストセラーを狙って際本を書くような軽薄な「学者」とは本質的に異なる学究としてのヴォーゲル氏が、はからずベストセラー作者になったことの誠実な戸惑いについては、氏自身が次のように語っていることを知るべきであろう。「一般ジャーナリズムの各種メディアは、実に容赦なくアカデミズムの世界の中に踏み込んでくる。それだけならいいのだが、学者たちの業績を、その学問的な価値を度外視して、ジャーナリストチックな物指しで測定する。で、どういふ結果が起るかという、真の学問的業績にはまったく関係なしに、偉い学者が決ってしまう」(「洋

魂和才」の時代」、『中央公論』一九七八年九月号)。

私はかつて、一九七〇年の夏、ケンブリッジのヴォーゲル氏の家で氏の手造りのオムレツを御馳走になりながら、すでに一九六三年に「日本の中産階級」の著書をもつ氏が、ヴェトナム反戦運動や中国文化大革命に鼓吹されたアメリカの若手、大物の中国研究者たちの毛沢東信仰に直面して、中国研究とともに現代日本研究に再び本格的に取り組もうとしていることを聞かされたことを思い出す。そうした経緯が突っ込んだだけに、今回の著書の成功は、氏にとってもひととき感慨深いであろう。

さて、われわれ日本人がアメリカの一流大学の教授にジャパン・アズ・ナンバーワンといわれてい気になったり、それで初めて日本の国際的地位について目覚めるというのであれば、それは大変困ったことであるが、ヴォーゲル氏の著書は、その副題が「アメリカへの教訓(Lessons for America)」であり、本書が氏の三人の子供に「君たちがよりすばらしいアメリカに生きていくことを願って」捧げられていることにも示されているように、そもそも「ジャパン・アズ・ナンバーワン」は今日のアメリカ社会の荒廃に深い危機感を抱いているアメリカの知性が日本の奇跡を鏡としてアメリカ人にその再生の道を説いたアメリカ人のための警告の書なのである。それほどまでに今日のアメリカ

社会の危機は深まっている。私自身、この九月初旬に約二週間、二年ぶりアメリカを訪れてみて痛感したのは、そのようなアメリカ社会の病理であると同時に、それとの比較における、ジャパン・アズ・ナンバーワン」の実感であった。

こうした印象は、まず現象面をとらえれば、いまや犯罪都市といっているニューヨークのあの落書きだらけの地下鉄をはじめ、ホテルタクシー、飛行機その他もろもろのサービスに接しただけで、たちどころに実感されるのだが、これにたいして、乗り物、食べ物、街頭の光景その他、東京がいかに行き届いた都市であるかが歴然とする。例えば、私自身、いまから十数年前、初めてアメリカを訪れたときには、まさにアメリカのすべてが別世界のように目を見張ったものであったけれども、こうして、この十数年間のあいだに状況は日米間ですっかり逆転してしまった。もとより、アメリカ社会の病理は、そうした現象面だけにとどまらない。ベトナム戦争以来のアメリカの「敗北」は、軍事的・戦略的な次元におけるよりも、精神的な面においてより深刻であっただけに、アメリカの東部エスタブリッシュメントは、なにか根本的なところで大きく自信を喪失したまま、偉大なアメリカの建国の理念やアメリカ社会にとつてかけがえのない民主主義の伝統さえも、大きく胸を張って支えようとする気概にいまや欠けてしまっているように思われてならない。このことは、アメリカの文化や生活様式を規定してきた中核的価値としてのWASP(白人、アングロ・サクソン系、プロテスタント)の崩壊現象と表裏するのであるが、カーター

政権に見られる内政・外交上のリーダシップの喪失は、こうした結果を見ていられるにもかかわらず前回の大統領選挙では圧倒的多数でカーターをアメリカ国民が選び、いま、それに代るものとして臍に傷をもつエドワード・ケネディしか存在しないという奇立ちとともに、東部エスタブリッシュメントの混迷をさらに深めている。

こうした状況にたいして、ユダヤ系知識人としてのヴォーゲル氏が投げた一石こそ、ジャパン・アズ・ナンバーワン」でもあったのである。私は今回、アメリカでも何人かの知人、友人がすでにこの本を読んでいて、さまざまの感想を聞くことができたが、本書はアメリカでは売れないだろうとの大方の予想とは違って、アメリカでも着実に読者を獲得するのではなかろうか。

ところで私が今回訪米したのは、ワシントンの大西洋評議会(The Atlantic Council)が主宰するアジアの安全保障にかんする共同研究プロジェクトにメンバーの一人として参加するためであり、今回の定期会議では私が主報告者になって八〇年代の中国とアジアを展望するというハードな重荷を背負っていた。大西洋評議会(会長は元国務副長官のケニス・ラッシュ氏は、しばしば重要な政策提言をおこなうことでも知られている一種の外交評議会、米外交界や国防総省、上院議員などの長老クラスに大学教授などが加わったまさに東部エスタブリッシュメントのシンボルのような民間団体である。

九月十二、十三日の両日おこなわれた今回の会議の議長は、元駐日大使で国務次官をつとめたU・A・ジョンソン氏であった。対ソ封じ込め政策の軍事化という点で戦

後アメリカの対外政策にきわめて重大な意味をもった国家安全保障会議の機密文書NSC 68作製計画の主査をつとめた元海軍長官・国防副官長で、ジョージ・ケナンのライバルでもあったポール・ニッツェ氏、アジア協定副会長のロバート・バーネット氏、東アジア・太平洋地域担当の前国務次官補マーシャル・グリーン氏、カリフォルニア大学(バークレー)のロバート・A・スカラビ教授、コロンビア大学のジェームズ・W・モレー教授ら約三〇名がアメリカ側から出席し、日本からは私と神谷不二・慶大教授が参加した。これらの錚々たるメンバーとともに、私のペーパーを基調報告としてみっちり二日間、英語で討論するということとは、私にとっても大変に労多きことであったが、感心したことはこれらの参加者がみな私のペーパーを事前に堪念に読んでいて、都合で欠席する場合でも自分の意見をタイプして提出していることであつた。そして、結論的にいえることは、いまや国際政治においてアメリカの相対的な地位が低下しつつある反面、ソ連の著しい軍事的拡大という脅威に直面しつつあるアメリカが、中国をソ連にたいする対抗勢力としてとらえ、軍事的にも中国が強大化することを望んでいることであり、米・日・中という太平洋横断的連携を対ソ軍事戦略上も形成したいという衝動が強く感じられたことであつた。

こうした米・日・中の軍事的連携への道こそ日本にとっては危険な選択であり、日本はこの点でアメリカと同じ立場に立ち得ず、日米安保体制下において、ここに新(以下三頁下段につづく)

◆母校の近況◆

先生がたの消息

学生部長 鈴木 幸 壽 (昭18D)

ときおり、学の内外でお逢いする同窓各位からよく訊ねられることは、在学中に指導を受けた先生がたが現在でもご在職なのか、どうしておられるか、また出身の語学科ではどんなスタッフでどんな授業をしておられるのか、といった研究室を中心とした先生がたの動静。毎年卒業生が出て新入生が入ってくるというほどの異動は、先生がたのばあいもちらんありませんが、十年ぐらいつと大分顔触れも変わってきます。そこで、今回から毎回三語科程度(一般語科目)語学科担当教官以外も含むの教官の消息をお伝えすることにしました。今回は、若返ったスタッフ構成の語学科(といっても、他の語学科が老齢化しているというわけではありません)について紹介することにします。何といても平均年齢四〇―四四歳という若さを誇っているのは、ロシア語学科と中国語学科といえるでしょう。そこで先ずロシア語学科。昭和二十四年大学発足当時は、佐藤勇先生が主任教授で、東郷正延、和久利智一、石山正三の三先生方でした。佐藤先生は昭和四年に本学の教壇に立たれ、実に三十六年余にわたる勤続ののち、昭和四十年に退官されましたが、早大の客員教授をされ、現在は悠々自適のご生活。悠々自適といえ、東郷先生も昭和四十六年に退官されて同じく悠々自適のご生活。和久利

先生はやや遅れて昭和四十九年に退官され、現在は早大客員教授をされています。ただこの間、昭和四十八年十一月に石山先生が急逝されたのは、ロシア語学科にとって痛恨の極みでした。しかし、こうした立派な先生方の衣鉢をついで、原也教授(27年卒)を陣頭に、新田実(29年卒)飯田規和(30年卒)志水速雄(36年卒)の三教授のほか、磯谷孝助教授(38年卒)と最年少の中沢英彦助手(48年卒)というスタッフが専任、外国人教師・講師各一名、非常勤講師八名の陣容で教育・研究がおこなわれています。文学は原・飯田の両教授、中本信幸(ドストエフスキーの文学論、佐藤泰子(ソビエト演劇)の両講師、語学は新田教授、磯谷助教授、中沢英彦助手のほか、佐々木秀夫(ロシア語史)、石井哲士朗(ロシア語文体論)、野村タチアナ、佐藤純一といった講師陣、事情は評論家として大活躍の志水教授と新田教授、それに米川哲夫(ロシア近代史)講師が担当されています。このまま推移すれば、これから十二年間は専任に関する限りこの陣容でやっていくわけです。なおロシア語学科と無縁ではない教官スタッフとして、言語学の千野栄一教授(30年卒)と社会主義経済論の岡田進教授(35年卒)をロシア語学科出身者として挙げておきたいと思えます。

中国語学科は平均年齢四〇・五歳という若さをもったスタッフ構成です。やはりロシア語科同様、大学発足当初は清水元助先生を筆頭は田中清一郎、鍾ヶ江光、長谷川寛の三先生に包先生が外国人教師としておられたわけです。清水先生は大正八年のご卒業、昭和十五年四月退官されるまで、ロシア語学科の佐藤先生よりも長く三十九年余勤続されました。戦後間もなく昭和二十一年に田中、鍾ヶ江、長谷川の三先生がご着任、スタッフが揃いましたが、田中先生は昭和四十四年に、長谷川先生は四十九年にそれぞれ退官、鍾ヶ江先生は学長として(事務取扱を含む)六年間ご苦勞願ひ、五十年四月任期満了で退官されたというのが、ご退職された先生方の経過です。清水先生はご自宅で悠々自適のご生活、田中先生は、現在明治学院大学の非常勤講師として、鍾ヶ江先生は京都外国語大学教授として教鞭をとられています。長谷川先生は本年春まで麗沢大学に在職されていましたが、病を得てご退職、目下入院ご加療中です。ご快復の一日も早からんことを祈っております。

さて、現スタッフは、こうした錚々たる諸先生の薫陶を受けたいづれも逸材、奥水優(33年卒)金丸邦三(32年卒)有田和夫(34年卒)の三教授のほか、依藤醇(43年卒)講師と小林二男(46年卒)助手、さらに東京教育大出身で鹿児島大助教授から本学に來仕された中国古典学(漢文)高橋均助教授がおられ、外国人教師一、講師三、非常勤講師十一名という陣容です。語学は奥水・依藤・高橋のほか横川伸、榎本英雄、平山久雄の非常勤の先生方、文学は金丸、小林の主任者のほか伊藤敬一、井

口晃、金岡照光の非常勤、事情は有田を中心に川村嘉夫、宮坂宏の非常勤の先生を配しての授業態勢です。中国語学科出身者としては、国際関係とくに現代中国研究の第一人者中嶋雄雄(35年卒)教授(国際関係論)がおられます。ロシア語同様、中国語学科教官スタッフはこのままで十七年ぐらいは続くこととなりますが、最近の中国との友好関係を反映して交換教授の制度が本格的にスタート、奥水教授は昨年十月から一ヶ月(十月帰国予定)の留学、九月二十六日には代って金丸教授が交替で留学が決定していますので、ますます充実した教育が期待され、前途は洋々たるものがあります。ロシア語学科のばあいは、正式な日ソ間の文化協定がまだないため長期留学の機会が開かれていたのは残念です。さて語学科関係以外の先生がたも沢山おられます(人文七、社会十二、自然一、一般語学四、保体三、教職二)が全学生の必修単位ということでもっともポピュラーなのは体育かと思えます。そこで現在の体育関係教官についてその消息を紹介しておきましょう。しかし戦後新制大学発足直後からといえ、学生から「角さん」という愛称で呼ばれた角原虎市先生(昭三)の消息についてはいけません。先生は大学発足後昭和四十三年退官されるまで十九年間、ほとんど一人で体育を担当され、この間大阪外大戦ボート大会の行事、運動部員の公私にわたる指導をされました。ご退官後一時札幌大学へ奉職されましたが一年余りで帰京され、爾来ずっとお元気で過ごされています。もう七十一歳古稀をこえられました。体育教官の数も逐次増員され、現在は川辺光助教授、阿保雅行講師、東憲一

このように拡大した本学は、その内容においても規模においても専門学校時代とはまったく違っているが、その背景にはやはり日外語学校の伝統がある。我々はいまもその伝統を受け継ぎながらも、新制大学としての新しい学風、新しい伝統をつくるべく努力しているのである。

このように拡大した本学は、その内容においても規模においても専門学校時代とはまったく違っているが、その背景にはやはり日外語学校の伝統がある。我々はいまもその伝統を受け継ぎながらも、新制大学としての新しい学風、新しい伝統をつくるべく努力しているのである。

このように拡大した本学は、その内容においても規模においても専門学校時代とはまったく違っているが、その背景にはやはり日外語学校の伝統がある。我々はいまもその伝統を受け継ぎながらも、新制大学としての新しい学風、新しい伝統をつくるべく努力しているのである。

このように拡大した本学は、その内容においても規模においても専門学校時代とはまったく違っているが、その背景にはやはり日外語学校の伝統がある。我々はいまもその伝統を受け継ぎながらも、新制大学としての新しい学風、新しい伝統をつくるべく努力しているのである。